

廬山寺談『三大部見聞述聞』の享受に関する一考察

—付・〔翻刻〕叡山文庫戒光院蔵『三大部述聞見聞目録』—

渡 辺 麻里子

一、はじめに

廬山寺流の教学は、その後の教学に与えた影響が大きく、中世の天台教学を考える上で大変重要である。廬山寺流は、十四世紀～十六世紀の天台宗の著作物に「廬談」「廬師云」などとして多く引用され、重用されてきたのである。

しかしながら、先行研究においてその重要性が度々指摘されてきた一方で、廬山寺流の談義やその実態については、いまだに解明されていない点が多い。また廬山寺の談義を記録した書物は大量に遺されているものの、著作の内容についても十分に精査されたとは言いがたい状況にある。

廬山寺の談義は、中でも三大部（『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』）の談義および宗要・義科の談義が著名である。本稿では、『廬談』の基礎的情報を整理した上で、『廬談』の享受と展開

について、『三大部見聞述聞』などの三大部の廬談の書や、『三大部述聞見聞目録』などといった『三大部廬談』の目録を中心に検討したい。

二、『廬談』の研究史概観

まず初めに、『廬談』とは何か、『正統天台宗全書目録解題』の諸氏の解説によりつつ確認しておく。

『廬談』とは、廬山寺で行われた談義、廬山寺上人の御談義という意である。廬山寺の上人が行った談義をまとめた、廬山寺流談義書の総称である。

談義の行われた廬山寺とはもともと住心覚瑜が開いた寺であった。比叡山の僧であった住心覚瑜は、はじめ洛北の出雲路に与願金剛院を開くが、廬山慧遠の霊告を感じて廬山寺と号した。後に、

(1)

比叡山から二条猪熊の地に隠棲し、当時盛んに講義を行っていた本光禪仙に付嘱したという。禪仙は船岡山に堂塔伽藍を建立し、「日本廬山天台講寺」と称してその第一世となった。その後、第二世禅月心善を経て第三世明導照源・第四世実導仁空に至る。明導照源の講説には前師以上に多くの山門の学徒が列集したという。この明導照源・実導仁空両師の講説を、後世「廬談」と称したのである。

続いて明導照源および実導仁空について確認しておきたい。まず廬山寺三世の明導照源（一二九八～一三六八）であるが、父は六条内大臣有房（一二五一～一三二九）で、その六男に生まれた。幼い頃に叡山に登り、遍照光院仲円僧正を師とする。比叡山上では、初め「常住房房雲」といい「浄聖院」と号したという。学問を究め、貞和二年（一三四六）四十九歳頃から、比叡山東塔南谷西尊院において三大部の講義を行った。また延文元年（一三五六）からは東谷実地房において講義をし、その後応安元年（一三六八）五月十二日、七十一歳で亡くなるまでこの講義は続けられた。その講義録が『廬談』として残されているのである。

実導仁空（一三〇九～八八）は、明導照源に嘱されて廬山寺を引き継ぎ、四世となった。明導照源・実導仁空の法系を廬山寺流といい、照源・仁空はそれぞれ共に天台惠檀両流を相承している。密教の系譜としては台密法曼流の法流を承けている。明導照源の師は仲円であり、仁空はその流れをくむ。仁空はその後、大原来迎院の示導について浄土宗西山義を学び、京都西山の三鈔寺に入って三鈔寺第十世となった。文和三年（一二三四）に十八道・胎・金の『立印鈔』を講じるが、その翌年の文和四年には廬山寺

四世にも就き、三鈔寺と廬山寺を兼帯することとなった。

次に『廬談』に関する先行研究を確認しておきたい。藤平寛田氏は、『廬談』義科の談義について論じた際に、次のように指摘した。

廬山寺流の教学は、円・密・戒・浄の四宗兼学の根本道場として、中古天台教学史上、重要な位置にある。密・戒・浄については、実導仁空（廬山寺第四世）と関連して、多方面からすでに研究されている。しかしながら、円教については、基礎資料の大部分が活字化されていないこともあってか、十分に研究されているとは言い難い。¹¹⁾

この論文は一九九二年のものであるが、現在もこの状況はそれほど変わっていないといえよう。

二〇〇〇年になると、清原恵光氏が『正統天台宗全書目録解題』の『義科 廬談 法華玄義』の解説において『廬談』についての基本的情報を整理している。¹²⁾『義科廬談』を「廬山寺流の義科論義の草稿（論草）を類聚したもの」と定義し、著者については「単独ではなく、日本天台廬山寺流を代表する明導照源（一二九八～一三六八）や実導仁空（一三〇九～八八）及びその門弟によって作成・類聚された書」と述べた。また『廬談』の成立年月については、「明記されていない冊もあるが、題下の記年等によれば、最も古いのは正和三年（一二三四）であり、貞治六年（一二六七）が最新年号である（文句・止観の義科『廬談』もこの年代に収まる）」と指摘した。

また『廬談』の意義や廬山寺の学風について以下のように述べる。

本書に収める論草には、その奥書等によって、廬山寺の

天台大師講や、比叡山の横川四季講堂、あるいは東塔南谷西尊院の講筵に臨んで準備されたことが知られる。横川四季講は、良源によって始められた重要な講会であり、西尊院では、照源が盧談『三大部見聞』を講じており、それぞれ豎義りゆぎも行われた場所である。南北朝時代、廬山寺の一流は四宗兼学をもって山家教学の發揮に大きな足跡を残した。特に経軌祖釈に基づく穩健精細な学風を特色とし、東塔北谷竹林院（檀那流）の流れを汲みながら、当時盛行した口伝主義本覚法門とは一見無関係に見える。

そしてその上で『盧談』の談義者を次のように指摘する。

盧談とは、廬山寺上人の御談義との意味であるから、照・仁二師（筆者注、明導照源・実導仁空²³）の經典の講説も盧談と称するし、さらには、当流の諸学匠の所説をも広く盧談あるいは盧流という。しかしながら古来論義書の典型でもある義科論草のこの類聚書に、特に『盧談』の書名が与えられて来たのである。本書には、顕幸・志玉・仙円など仁空同門あるいは門下として聞こえた学匠の名が見える。

つまり『盧談』の談義者が単独でないことを述べる。この点は『盧談』という文献の複雑な点であり、扱いを難しくしている原因の一つなのである。

(3) また同じく『正統天台宗全書目錄解題』において、池田晃隆氏による『玄義本書聞書』の解説がある。²³これも『盧談』の一書であるが、「本書は、南北朝時代の注釈書で、天台大師（五三八〜五九七）述『法華玄義』（大正蔵三三三）の講談注釈である。」と述べ、その撰者について「本書の撰者は、「廬山寺御談」とあるところか

ら、廬山寺第三世明導上人照源（一二九八〜一三六八）の五十三（五十六歳の講談を、弟子の顕幸が筆記した書（他筆もある）であることが知られる。「明導談」の明記はないが、各巻書題下にその講談日時があり、奥書に顕幸筆が記録されている。」とする。また本書の内容について、以下の様に解説する。

それは、観応元（一三五〇）年七月十六日より文和二（一二五三）年六月二十六日までの四年間、比叡山東塔南谷の西尊院における、毎年の夏安居の講会での『法華玄義』の講義を、会下の顕幸が筆録した書と見られ、明導の講義録であることが推測される。本書に限らず、明導照源はこの夏安居において、貞和二（一二四六）年より応安元（一二六八）年入滅する歳まで、毎年欠かさず法華三大部を講じ、講者・聴者の双方ともに真摯な講座であったと記録されている。

その講録は『三大部見聞』『三大部述聞』として伝えられ、その他の講録も筆録または明導自撰の書で、義科または問要の『盧談』として現存している。

そして『三大部見聞』『三大部述聞』の特徴として、次のように指摘する。

本書の成立は、巻題の下に講義の日時が記されている。（中略）本文中にも講義の日付が順次記されており、その講説の年月日まで知ることができる。しかし巻五が欠本のため本書は十九冊である。巻七末には「古本ヨリ奥不足也 筆者式部卿 墨付十七丁」との記載がある。

以上長々と述べてきたがここで概要をまとめておく。『盧談』

は、十四世紀の天台宗における談義を、講義の年月日を示しつつ詳細に記録したもので、談義の実態を詳しく伝える大変貴重な資料であった。

しかしこれだけの重書であるにもかかわらず、全体に及ぶ内容の分析などの研究は、まだ不十分である。近年、小川晃洋氏によって『摩訶止観』の注釈書の詳細な整理が行われているが、まだ全体には及んでいない。

また翻刻についても、全体が誰でも手に取れるような活字化された状態にない。『三大部 廬談』は、以下のように全体が『三大部見聞』と『三大部述聞』を合わせた構造となっている。

・『三大部見聞』（＝『三大部聞書』、『三大部本書聞書』）

（『玄義見聞』『文句見聞』『止観見聞』）

・『三大部述聞』（＝『三大部聞書』、『三大部述聞抄』）

（『玄義述聞』『文句述聞』『止観述聞』）

このうち『三大部見聞』のうちの一つ『玄義本書聞書』（波線部『玄義見聞』⁵⁾は『天台宗全書』第十九に所収されるが、その他の『文句本書聞書』（『文句見聞』）・『止観本書聞書』（『止観見聞』）や、『三大部述聞』（＝『三大部聞書』、『玄義述聞』『文句述聞』『止観述聞』）はまだ翻刻がされていない。

論義では、『義科 廬談』二十義科のうち『法華玄義』所依の七義科十六論目が『続天台宗全書』論草1『義科 廬談 法華玄義』に、『法華文句』所依の五義科他、『維摩經文疏』『涅槃經疏』『観無量寿經疏』所依の合計八義科が『続天台宗全書』論草2『義科 廬談 法華文句』に所収されて既刊、『義科 廬談 摩訶止観』が近刊予定という状態である。

なお『廬談』については、『三大部 廬談』『義科 廬談』の他にも「猪熊抄（猪熊鈔）」と称される一群の書など、検討すべき課題がある。

『廬談』はこうした構造であるために、全体像を研究する上で様々な問題があった。元来大部の書である上に、書写伝授の間で巻数が一定せず、古来から欠本や重複などの様々な混乱を抱えていることが原因である。これらの点は、後述するようにすでに中世・近世において問題視され、整理分類が試みられ、目録が作成されていたことが判明したのである。

そこで本稿では『廬談』のうち『三大部廬談』について、近世期に整理された目録や関連書をもとに、享受という視点から考察するものである。特に叡山文庫戒光院蔵『三大部述聞見聞目録』に注目し、『廬談』の抱える本質的な問題について論じたい。

三、廬山寺談『三大部見聞述聞』の関連書について

『三大部見聞述聞』はその名を冠する関連書目が種々あるため、まず大きく分類した上で、概観しておきたい。

〔分類〕

A・諸本

B・目録

まず、A「諸本」であるが、これは『三大部見聞述聞』の本文そのもののことである。叡山文庫真如蔵や、妙法院、園城寺など各

所に現存している。但し残存状態は区々で、調巻も様々である。本書は指針とすべき目録が整備されておらず、原本の各冊に順番を明確に示す題名などが明記されていないため、所蔵者が整理できないままに保存されている場合が多く見受けられる。

叡山文庫真如蔵本について、少し具体的に検討してみよう。叡山文庫真如蔵本『三大部 廬談』は、以下の様に所蔵されている。

〔見聞〕

①『玄義見聞』十卷・写二十冊

(所蔵者番号、真如・内・三・二七・一九〇)

②『文句見聞』十卷・写二十一冊

(所蔵者番号、真如・内・三・三一・二二〇)

③『止観見聞』十卷・写三十九冊

(所蔵者番号、真如・内・三・二五・二二三)

〔述聞〕

④『玄義述聞』十卷・写十四冊存

(所蔵者番号、真如・内・三・二六・一九七)

⑤『文句述聞』十卷・写二十四冊

(所蔵者番号、真如・内・三・三〇・二〇八)

⑥『止観述聞』十卷・写二十二冊

(所蔵者番号、真如・内・三・二三・二三八)

(5) ④『玄義述聞』は、現在は十四冊存であるが、元来は十卷二十冊と推察される。書誌であるが、①『玄義見聞』で説明すると、表紙は栗皮無地。ただし料紙は、表紙と見返しと共に、版本の反

故紙を使用する。表紙には外題が記されるが、中央に「玄義第一見聞^{三冊}」と朱書で記したものと、表紙左に「見聞 本書聞書 玄義第□」と墨書で記したものと二種ある。その他表紙には、朱書で「山門東塔南谷 浄教房」「物計貳拾冊之内」「真如蔵」「律」とあり、墨書で「東南浄教房常住」と記される。この旧蔵を示す記事は本文の冒頭(内題右行)にも、「山門東塔南谷 浄教房 真如蔵 律」と墨書で記される。法量は、縦二六・六×横一九・三、楮紙の袋綴である。行数は一定ではないが、おおよそ十一行から十四行書である。書入は様々にあり、墨書訂正や抹消線も多い。墨書の肩点、朱書の丁付の注記や訂正などもある。

内題は、『玄義第一見聞』の場合、「玄義第一本書聞書」とあり、内題下に「観応元年七月十六日於西尊院始之 廬山寺御談」と講義の日付や講談者が記される。小口にも題があり「玄見一」と記される。

書写奥書は全冊ではなく、所々に見られる。『玄義見聞』の場合、以下のような奥書がある。

寛文七^丁未^末閏二月十五日於武州東叡山見合本疏一授了

探題法印実俊

(『玄義第一見聞』)

寛文八年三月十三日 一覽之□校合了

探題法印実俊^{五十一才}

(『玄義第一見聞』)

永和五年二月日書写之 実運

(『玄義第一見聞』)

于時寛文八年三月廿六日一晚之□校合畢

探題法印実俊^{五十一才}

(『玄義第二見聞』)

寛文八年^{戊申}親月自恣日一校訖

探題法印実俊^{五十二歳} (『玄義第三見聞』)

以下、所々に書写奥書が見られるが、全体として寛文年間に実俊によって書写されたものということが確認できる。

参考に、妙法院蔵『三大部見聞』および『三大部述聞抄』の冊数を示しておく。()内は所蔵者整理番号である。

〔見聞〕

- ①『法華玄義見聞』写十九冊(長7―1―19)
- ②『法華文句見聞』写十八冊(辰3―1―18)
- ③『摩訶止観見聞』写三十三冊(宿2―1―33)
- 〔述聞〕
- ④『法華玄義述聞抄』写二十冊(列1―1―20)
- ⑤『摩訶止観述聞抄』写二十二冊(列6―1―22)
- ⑥『法華文句述聞抄』写二十一冊(張1―1―21)

冊数を比較すると、叡山文庫真如蔵本と妙法院本はほぼ一致することがわかる。

次に、Bの「目録」であるが、これは大きく分けて二種類あることが確認できる。一つは、三大部本文のどの箇所を談義注釈したものであるかを書き上げて、注記を加えたものである。もう一つは別名「巻数目録」とも言い、各冊の特長を挙げ、三大部の各十巻についての冊数などの情報をまとめ、整理の手引きとしたものである。

B「目録」に該当する書を、具体的に二例挙げてみよう。

まず第一に、叡山文庫生源寺蔵『三大部見聞』写二冊(所蔵者番号、生源寺・内・六・四六・三三)である。書誌を記すと、寸法は、縦一七・〇×横二二・四糎で、表紙は縹色無地。装訂は袋綴。一頁は七行書である。外題は朱書で「三大部見聞」上とあり、内題は「三大部和見聞」とする。小口に「三大文本／三大文末」とある。界線は押界があり、天界一・六糎、地界一・五糎、界高一四・七糎、界幅は一・五糎である。書入は朱書で見出点・朱引・肩点などが多く記入される。丁数は第一冊が六十五丁、第二冊が五十三丁、合計一一八丁である。「澄真蔵」の墨印(陽刻・単郭・長方、三・六×一・五糎)の他、無枠・陰刻・方形の朱印(四文字、二・二×二・三糎)、単郭・陽刻・方形の墨印(一文字、〇・九×一・〇糎)がある。

奥書(尾題後)は以下の様に記す。

已上三大部畢^ヌ。

右此^ノ一帖者山門飯室谷尊祐法印秘蔵本也。実源写^レ之。其

後以^ニ懇望^一写^レ之畢^ヌ。後見^ノ学者一返^ノ廻向可^レ有者也。

付^{タリ}此書秘蔵故^ニ以^ニ懇望^一求^レ之。

右此御本二冊者、慶応元^{乙丑}五月中旬頃、大興智宥師関東下向之節、被^レ付属^ニ予澄真^一畢。

比叡山飯室谷の尊祐法印の秘蔵した本を、実源が写したものと
いう。内容は、構成の注記と、項目の書き上げに三大部の該当

数を合わせて記したものである。小型の本で、目次の手控えとして作成されたものと思われる。

また、別の目録を挙げてみたい。叡山文庫毘沙門堂蔵『三大部述聞見聞目録』写一冊（毘沙門堂・内・六・二〇・一三二）は、各冊の内容を書き出した目録である。書誌を記すと、寸法は、縦二七・〇×横一九・六糎、丁数は全十一丁、一頁十行書。表紙は朱色無地で、装訂は袋綴。外題に「三大部見聞目録」と記し、内題を「三大部述聞見聞目録」とする。表紙に「公海蔵」の墨書、また「公海蔵」の墨印（双郭・陽刻・長方）がある。

内容は、各冊の冒頭の注釈箇所を書き上げて、各冊が三大部のどの箇所を注釈しているか示す目録である。目録の本文は、具体的に示すと以下のようなものである。

三大部述聞見聞目録

止観述聞

- 第一 開白從初至則識宗元
- 同 從涉六年以伏見下
- 同 從既信其法須知三文下
- 同 從更広説漸初亦知実相下
- 同 弘云宗虚無者已下
- 同 從無作四諦者皆是実相
- 已上六冊
- (中略)
- 第十 開白本從初至流出支流
- 同 一家天台意論生死始終

已上二冊

止述聞合二十二冊

(中略)

玄見聞合廿卷

見聞述聞惣合

述聞合

見聞合

奥書には「正保三^丙極月吉日」とあり、正保三年（一六四七）の著作と判明する。著者は未詳である。このようにして『三大部廬談』に関して、その整理のために種々の目録が作成されたのである。

四、叡山文庫戒光院蔵『三大部見聞述聞目録』について

では次に、本稿で注目する『三大部見聞述聞目録』について述べていきたい。叡山文庫戒光院蔵『三大部見聞述聞目録』は『三大部廬談』について、その内容構成を精査し、整理した目録である。本書は近世前期において混乱していた『三大部見聞』を近世初期の比叡山において整理したものと思われ、その内容注記が示唆に富んでいて大変重要である。

本目録については、小川晃洋氏が『摩訶止観』を注釈整理した論文で用いている他、成田教道氏が、西教寺蔵『三大部述聞卷数』『三大部見聞卷数』について詳述しているのが参考になる。⁶⁾

成田氏は本目録を「本書は、叡山において「三大部述聞」と「三

大部見聞」を書写管理するにあたって作られた目録である。「三大部述聞」と「三大部見聞」は合わせて「三大部廬談」と称されている。」と説明する。西教寺蔵『三大部述聞卷数』『三大部見聞卷数』は、奥書に「万治元年（一六五八）陽月中旬 玉林房堯雅（花押）」とあり、堯雅の書とわかるが、堯雅については不詳である。西教寺本と戒光院本は、両書ともに『渋谷目録』二二頁に記載があり、本文は酷似しているが、直接関係があるかどうかは不詳である。西教寺本については成田氏の論文に詳しく、ここでは戒光院本について述べていくこととする。

戒光院本は「寛文元年九月日 播陽斑鳩寺仏餉院寂阿」とあって、寛文元年（一六七三）九月に、播磨国斑鳩寺の仏餉院寂阿によつて書写されたものと判明する。

斑鳩寺は、中世において栄えた談義所で、兵庫県揖保郡太子町にある天台宗の寺院である。法隆寺の経済的基礎をなした^{いんぎょうじょう}鶴荘の寺領を管理するために、法隆寺の子院として平安時代に成立したらしい。建武三年（一一三三）新田・赤松の合戦で全勝。弘治二年（一五五六）、円勝寺の僧昌仙が赤松広英らの援助を受けて諸堂を再建する。もとは法相宗であったが、この再興以後、天台宗に属し、比叡山の末となる。

筆者の寂阿は、詳しいことはよくわからない。『渋谷目録』（二四頁下段）によると、『三大部序注』を承応二年（一六五三）に書写したとある。参考までに、『渋谷目録』に示される『三大部序注』の本奥書を示しておく。

本云

承応元年（一六五二）四月三日於三井寺止観義例講談之

砌書写之 舜海

続いて、叡山文庫戒光院蔵『三大部見聞述聞目録』写一冊（所蔵者番号・戒光院（和）・内・六・五八・九九）の書誌を示す。寸法は二八・四×二〇・二糎、丁数は十五丁。表紙は香色無地で、装訂は袋綴。外題を「三大部見述目録」とし、表紙に「二柱軒／寂阿」と書入がある。内題には「三大部述聞卷数」と記す。

本文は、『文句見聞』の冒頭を見てみよう。

。文句見聞 十九帖

・文句第一本書聞書 文和二年六月廿八日於西尊院始之 廬談 一全

自一ノ一序 至同廿丁

・文句第一聞書 享祿四年二月廿四日始之北林房尊契御談 一上

自一ノ一廿二丁 至同五十九丁

【文句第一】 尊契談 日譜記 一中

自一ノ一廿六丁 至一ノ二終

・文句第一聞書 四帖之内第四 私云尊契談 一下

。私云文句一尊契談四帖有^{リト}見^{タリ}。第三帖目一冊紛失^{セリ}。

・文句第二聞書 文和三年五月十五日於西尊院始之廬山寺御談 二全

・文句第二聞書 延文四年^巳八月九日於西尊院始之廬談 二全

自一ノ一初丁 至同五十四丁

△文句第二卷聞書 二帖之内上 私云尊契談 二本

これを西教寺本と比較すると、ほぼ同文であることが確認できる。⁽⁷⁾

また目録末(尾題後)に、本目録について、編纂した事情や、『三大部述聞見聞』を整理した方法についての解説が記される。長文のため、部分ごとに本文を示して説明したい。

三大部見聞述聞都合卅一巻

但往古ノ写本百卅五巻也。爾トモ

。玄七述聞切レテ別巻ト成リタルヲ今ハ合シテ為ニ一冊ト。

。玄六述聞ニ往古ノ本重本有之。今除レ之。

。玄十見聞ニ纒ニ三紙有ルヲ第九ニ合シテ為ニ一冊ト。

。止五見聞切レテ半分止ノ述聞ニ入ルヲ今ハ合シテ為ニ見聞一冊ト。

古ノ分四冊往古ノ写本ヨリ減スル之者也。故ニ今般調卷ノ時減ニ四

冊ヲ為ニ而卅一冊ト。

又山門東西兩塔ノ本調卷不レ齊カラ増減有之。故ニ今般予所

持ノ本京都往古ノ本ノ如ク調卷シテ而モ減ニ四冊ヲ者也。四冊ハ古ニ一々

挙テ之示。

まず、全体の冊数を調整したことについてである。乱丁や重複が生じている箇所を確認し、それぞれもとの有るべき所に移動させたことや、それによってもともと百三十五冊あった『三大部見聞述聞』を百三十一冊に直したことが記される。

例えば『玄義述聞』第七では、綴じが切れて離れてしまい、別冊にされてしまっていた状態をもとに戻した。そのため二冊であったものが一冊になったという。このことを目録では次のように注記して一致する。

・玄義第七 廿三日 若約已今論本迹者○已下 七全

。前ノ第六ノ奥十紙計切レテ此卷ニ入レテ写本ニ有レ之。今此レヲ切り分テ前ノ第六述聞ニ切入ル。

又此卷ノ奥ニ施聞癡ノ三義ヲ以テト有ルヨリ十二三紙写本ハ別巻ニシテ有レ

之。然トモ本ノ体ヲ見ルニ此卷ノ奥切レテ別巻ト成リタルト見タリ。故ニ今調卷

シテ一卷トス。此三大部見聞述聞ノ内如レ此乱脱非レ一ニ見者正レ之。

綴じが切れた十二〜三枚の紙が別の巻のようになっていたが、よく内容を見ると一続きのものとの判明、後半部分が離れていただけであった。そこでそれを合わせたという。

また『玄義述聞』第六は、全く同じ本(重本)があったため、それは除いて一冊を減じた、という。目録本文内の注記には、次のように記して一致する。

・玄義第六聞書 正平七曆五月十日於西尊院 六全

。此間ニ写本ニ重本有リ。今除之。

また『文句見聞』第十では、ほんの三紙(三丁)しかないため、三丁で一冊を独立させず、第九に付して第九と第十で一冊にしたため、冊数としては一冊を減じることとなった、という。目録本文では次のように注記している。

・文句第九本書聞書 貞治五年丙午七月一日於西尊院始之 廬談 九全

。此卷ノ奥ニ文句第十ノ見聞合シテ一冊トス。写本別巻トスト云、ヘトモ 十

纒ニ兩三紙有レ之。故ニ今文句第九ニ合シテ一冊トナス。

『文句第九本書聞書（＝文句見聞）』の次冊には、第十の一冊があるが、わずかに三紙のために別巻（別冊）とせず、第九に合わせたというのである。

最後に、『止観見聞』第五は、分かれてしまつてその上に『止観述聞』の方に入つていたので、『止観見聞』第五に戻して合わせたため、一冊が減じた、という。目録中の注記には以下のように記している。

自五一初丁至五二〇五丁

・止観第五本書聞書 貞和二年六月晦日於西尊院始之 廬山寺御談 五天

。此卷ノ奥ニ六日止云三障四魔者〇トアルヨリ已下廿七八紙、別卷ニシテ述聞ノ内ニ古本ハ有レ之。今正レ之之往古ノ本紛乱シテ別卷トナレリ。講談日付ノ為体ヲ以テ思フニ一卷トスルニ便リアリ。

写本では、「紛乱」して別巻となつてはいるが、講談の日付を見ると続いていることが判明するので、続きの一卷とすべきであると判断し、一冊にまとめたというのである。

以上のことから、元来写した写本は全部で百三十五冊あつたが、調整を加えた結果、四冊減じて三百三十一冊となつた、というのである。目録中の注記と目録末の解説は一致している。

また解説の続きをみていこう。

又山門三塔ノ新本或ハ以ニ述聞ヲ入レ見聞ノ内ニ以ニ見聞ヲ入レ述聞ノ内ニ。或ハ古来一冊ノ本紛乱シテ成リ二冊ト第六ヲ為ニ第七ト等ノ類甚不レ少。今般調卷ノ時講談ノ年号日付或ハ本ヲ為体以テ互ニ交

雜シテ正レ之。此目録ノ内ニ当ニ其ノ卷ニ指南有レ之。猶見述之内未決ノ本ヲハ任ニ写本ニ入レ置ク者也。京都往古ノ写本於ニ藏庫ノ内ニ久歴ニ星霜ニ表紙等紛乱シテ見聞述聞ノ異難レ弁。或ハ乱脱シテ一卷ノ本成ニ兩冊ト等謬リ校正之ヲ之者無レ之故ニ如レ此歟。見者察レ之。

次に、「見聞」と「述聞」の内容の違いがよくわからなくなつてゐるために、本来「見聞」に所収されるべき書が「述聞」に入つていたり、その逆があつたりしたため、それらの内容を踏まえ、また前後のつながりを検討して直したという。これらの点は、目録内の注記にも多く見られる。目録内の注記を見ると、確信を持つて直したものと、「未決の故」にそのままにしておいた、というものがあつた。例えば、以下にあげる「玄義第一聞書」は、もとの写本は「見聞」に入れていたが、内容や日付から勘案して、述聞に入れるべきと判断して移動させたもの（△印を付す）、「玄義第七」の例は、内容からすると「見聞」ではないかと考えるが、「未決」のため、つまり明確な結論が出せないために、そのまま「述聞」に置いておく（○印を付す）、とする。

△玄義第一聞書

教相下

一中

。此卷写本ハ見聞ニ入レリ。爾トモ玄ニ之分三冊ノ次第講談ノ日付等ノ連続ヲ以テ思フニ述聞三卷有ル内ノ中巻ト見タリ。故ニ今述聞ニ入。

○玄義第七

問要也

同玄文中引今經本迹二門〇迹耶

七

。此卷見聞ナルハシト見タリ。爾トモ未決ノ故ニ任ニ写本ニ述聞ノ内ニ入レ之。

続いて、談義者や筆者者についての話題となる。

又見聞ノ内題ノ処ニ本書聞書ト有ルハ是顯幸ノ筆記ト見タリ。三大部俱ニ爾リ。又見ノ内ニ横川澄全ノ筆記同直海ノ筆記有レ之。供ニ廬山寺明道上人談レ之。

文句見聞自第一至第三三井寺勸学院ノ一代尊契講談都合六冊有レ之。日諦ノ筆記也。

又止観第五見聞ニ顯幸ノ筆記ニ非ル。本雜シテ有レ之。

ここでは、談義者および筆者の異なるものが混在していることについての説明がなされている。「本書聞書」とするものは基本的に、顯幸の筆記であること、ただし『玄義見聞』の中には、横川澄全の筆記や、同じく横川直海の筆記も混ざっていることを述べる。これらは筆者は異なるがすべて廬山寺明道上人（明導照源）の談義であるとする。しかし『文句見聞』には、三井寺勸学院尊契の講談、日諦の筆記であるものが第一から第三の間に六冊混ざっていること、『止観見聞』第五には、顯幸の筆記ではないものが混ざっていることを指摘する。

又通シテ三大部ニ奥談ト云本多交雜シテ有レ之。京都猪熊奥之坊歟ト見タリ。実談ハ実蔵坊歟。

(II) 続いて全体に、いわゆる『廬談』ではない本が混ざっていることを指摘する。「奥談」と言つて、猪熊奥之坊での談義とされる

ものや、実蔵坊の談義である「実談」も混入していることを指摘する。この混入は、『廬談』の構成を複雑にしている。

又見聞ノ内顯幸ノ筆記ト述聞ハ多分同聴異述ノ筆記也。講談ノ年号日付ヲ以テ思ニ爾見タリ。故ニ述聞ハ顯幸ノ筆記ニ非スト見タリ。止十述聞ノ終リノ奥書ヲ見レ止観一部ノ述聞ハ澄空ノ筆記歟。

さらに『三大部見聞』中で顯幸の筆記であるものに対して、『三大部述聞』には、同聴異述の筆記があることを述べる。「同聴異述」とは、同じ日付の同じ講義を異なる筆者が筆録した記録である。そのため「見聞」が顯幸の筆記であれば、「述聞」は顯幸ではない者の筆録となる。『止観見聞』第十の奥書を見ると、澄空の筆記かと思われ、『止観見聞』のうち一部分は、澄空による筆録と判断されるという。

又此目錄ニ頭ニ△如レ此有ルハ古本見聞述聞入レ替リタル本ニ如レ此印シラナス。□如レ此有ルハ本ノ口ニ卷付無キ本ヲ今目錄ニ載ル時私ニ部ノ名卷ノ名ヲ書付ルヲ如レ此印シラナス。頭ニ如レ此アルハ見聞述聞ノ間未決ニシテ任ニ写本一入ニ置ク之ニ如レ此印シラナス。

つづいて、本書における記号について、凡例説明を行っている。「玄義第一聞書」「文句第一聞書」などという目録の見出し一行ごとくに、朱で「・」「△」「○」などの印が入れられ、また「玄義第六」のように、文字を囲んだものがある。これらについてその意味を解説している。△の付されたものは、古本（書写した原本）にお

いて内容を精査してみると、見聞と述聞が入れ替わっているものが見つかった。本来見聞にあるものが述聞に、述聞にあるべきものが見聞にあるという場合である。その場合は、明確に根拠を示し、本来あるべき位置に戻した。そのように移動を行ったものに△を付している。また○を付したものは、見聞であるべきか述聞であるべきかの判断がつかないために、保留にしたものである。疑問はあるものの、○印を付して、そのままに置いておいたものの印である。

文字を□で囲ったものは、原本の冊頭に題名が付されていないかのために、内容を検討し、「文句一（十）」などと、仮題を付したものである。目録整理のためには題名が必要のため、それを付したが、原本に付されていたものと区別するために、□で囲んでそれとわかるようにした、というのである。

続いて、談義者「明導照源」や筆者「顕幸」の号についてである。

廬山寺^{ラハ}号^ニ浄聖院明道^{（ママ）}上人^ト。見聞ノ筆者顕幸^{ラハ}号^ニ実蔵坊^ト。義例猪熊抄^ニ爾見^{タリ}。

廬山寺は、浄聖院明道（明導）上人と号する。見聞して筆録した顕幸は、「実蔵坊」と号している。これらの情報は、『義例猪熊抄』の奥書に依ったという。

又問要作^レ之、卷都而十一卷有^レ之。一々之卷ノ下ニ問要也^ト以^レ朱書^レ之。所謂^レ・玄二見^談・玄六述^談・玄七述^談・止一見^談・止一見^談・止五見本^談・止五見末^談・止六見^談

・止一見^{嵯峨殿御談}・止一見^{十義}・止十述

また中に、問要の書が混在している。それらについては、目録の見出題の下に「問要」と記してそれとわかるようにした。問要と朱書したものは、右の十一巻である、として一覽を挙げる。

慶安中於山門西塔院三大部見聞述聞全部捐浄贖令人傭書交講肆之暇手自書之古本紛失猶有闕本脱落晚還郷里見述之間混乱正之重本除之。調卷為一百三十一卷出目錄一貼留贈後学也。

寛文元年九月日 播陽斑鳩寺仏餉院寂阿

〔播州斑鳩寺仏餉院（朱印）〕

そして最後に改めて書写奥書を載せる。寛文元年（一六六一）に、播州斑鳩寺仏餉院寂阿が記したと記す。底本の写本は、比叡山の西塔院が所蔵する『三大部見聞』『三大部述聞』で、講義の合間に人に手伝わして書写したという。書写者や人数については記されないが、西教寺本の場合は、五十九名で書写したとあった。原本は紛失した巻や欠落した巻があったり、脱落があったりしたが、郷里に帰ってさらによく検証すると、内部に様々な混乱が見いだされた。そこで、この度百三十一巻に整理し直し、目録を一冊、後学のために作成したという。

この跋文と奥書により、『三大部見聞述聞』が寛文元年（一六六一）の時点で内容が混乱し、錯綜してしまっている状態が想定される。また一方で、当時の比叡山において、丹念に調査し内容を精査して調卷を整えた事情がうかがえるのである。

実際に現在比叡山で所蔵される『三大部 廬談』と叡山文庫戒光院蔵『三大部見聞述聞目録』とを比較すると、一致する箇所もあるが、一致しない箇所もある。戒光院蔵『三大部見聞述聞目録』あるいは西教寺蔵『三大部述聞卷数』『三大部見聞卷数』目録がどの『三大部 廬談』に基づいて整理されたのか、現在もその底本は存在するのかも含めて、今後さらに検討していきたい。

五、『三大部 廬談』の享受と展開について

『三大部 廬談』の享受と展開について、成田教道氏が「日蓮関係典籍・雑書に関するノート」⁽⁸⁾において重要な指摘をしている。

すなわち元亀二年（一五七二）の焼き討ちによって、比叡山の貴重な書籍がごとごとく焼失してしまった。そこで寛永十六年（一六三九）、天海の請いに応じ家光が幕下に命じて、当時頂妙寺に蔵してあった三大部の『述聞』『見聞』を書写し、日光輪王寺の宝物とすべく布達したという。頂妙寺においても門外不出の重書であり、比叡山の僧がわざわざ頂妙寺へ出掛けて書写したとされている。

叡山文庫生源寺蔵『本書見聞述聞并卷数目録』（写一冊、生源寺（追記）内・一・三八・一三四六A）は、天海の命による書写とその後の管理に関する重要な資料である。書誌は、寸法は、縦二七・二×横二〇・五糎、表紙は本文共紙で、装訂は仮綴のものである。綴目やのどに天海の割印が丁寧を押されている。奥書は「寛永十九年（一六四二）三月十八日 山門探題 天海」とあり、

卷末の添え書きから天海の指示で転写されたことがわかる。この後、『三大部 廬談』の書写と同時にこの目録も合わせて転写されていく。叡山文庫生源寺蔵本によると、少なくとも五回の転写がなされていることが確認できる⁽⁹⁾。厳密な管理のもとに書写される点から、近世期に入ってから、重書として重用されていたことが確認できるのである。

六、おわりに

『廬談』（三大部見聞述聞）は、中世における談義を忠実に著した貴重な書であるが、膨大な記録を残している一方で、その量多さと構成の複雑さ故にいまだに全体像がつかめていない。『廬談』の内容分析は天台教学の解明のために重要な課題であるが、現在の現存状態においては、全体像をつかむのはなかなか難しい現状である。

本稿は、中世・近世期においてすでに『廬談』の重要性が認識され、幾度も整理されてきたことを指摘した。数ある目録の中で、寛文元年（一六七三）に播磨国斑鳩寺寂阿が著した『三大部見聞述聞目録』は、内容を精査した上で全体の構成を整理した、近世期に行われた『廬談』研究として大変貴重である。この『三大部見聞述聞目録』は、現存諸本の分類整理に極めて有効なもので、『廬談』全体像の解明のために一層活用する必要があると考える。

その上で、各所に所蔵される『廬談』（三大部見聞述聞）を、実際にこの目録に基づき整理し、分析していくことが今後の急務の課題である。

【注】

- (1) 藤平寛田「明導照源と廬山寺流義科書『廬談』について」(『天台学报』三五、一九九二年一〇月)による。
- (2) 清原恵光「論草1 義科 廬談 法華玄義 解題」(『正統天台宗全書目録解題』春秋社、二〇〇〇年)による。
- (3) 池田晃隆「玄義本書聞書 解題」(『正統天台宗全書目録解題』春秋社、二〇〇〇年)による。
- (4) 小川晃洋「日本天台における『摩訶止観』注釈書の相承説」(『天台学报』五六、二〇一四年一〇月)による。
- (5) 別名『玄義聞書』『玄義見聞』『法華玄義聞書』など。観応元年(一二五〇)七月十六日から文和二年(一二五三)六月二十六日までの四年間の、廬山寺明導照源による談義を顕幸が筆録したもの。叡山文庫本を底本とし、巻五が欠巻となっている。
- (6) 小川晃洋論文(前掲注4)、成田教道「日蓮関係典籍・雑書に関するノート」(『興風』二〇、二〇〇八年二月)の「(12)三部述聞巻数・三大部見聞巻数」の項を参照。
- (7) 成田教道論文(前掲注6)三五五頁、西教寺本の写真参照。
- (8) 成田教道論文(前掲注6)参照。
- (9) 『本書見聞并述聞巻数目録』(叡山文庫生源寺蔵・生源寺(追記)・内・一二三八・一三四六・B、五冊)による。

【付記】

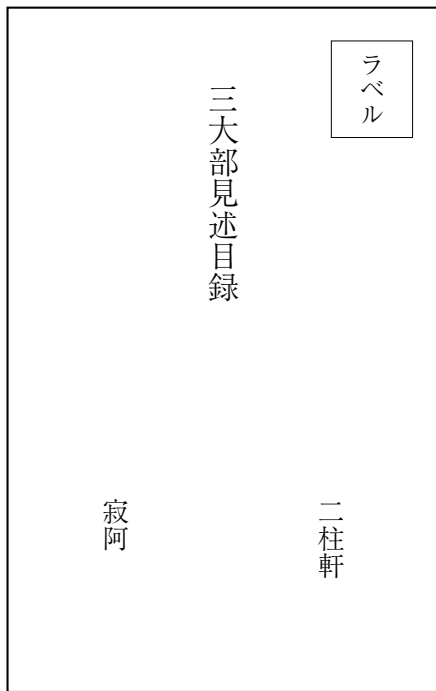
貴重な資料を閲覧させて頂き、また翻刻の許可を賜りました叡山文庫他、関係諸機関に、心より御礼申し上げます。

付・〔翻刻〕叡山文庫戒光院藏『三大部述聞見聞目録』

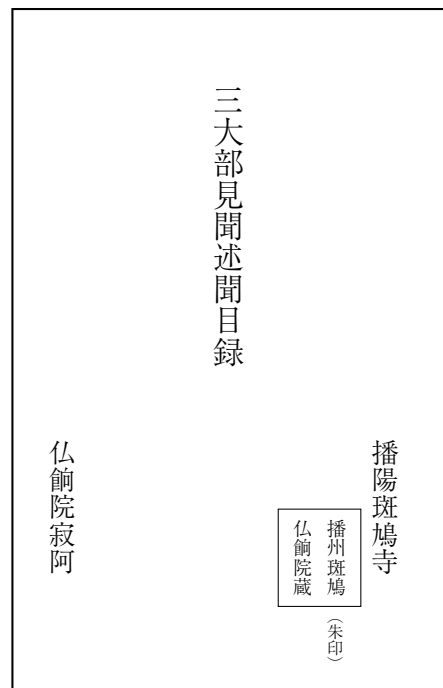
〔凡例〕

- ・底本は、叡山文庫戒光院藏『三大部述聞見聞目録』写本一冊（所蔵者番号：戒光院（和）・内・六・五八・九九）を用いた。
- ・返点・送仮名は底本に従ったが、一点のみの箇所にて二点を補うなど、文意不通になる箇所は、不足を補った。
- ・墨書と朱書は特に区別をせずに記した。文頭の記号「・／○／△」や、三大部の丁数「自一ノ初丁 至同卅八丁」などは、朱書である。底本の肩点（朱書）は略した。
- ・底本の丁数は「』1丁オ」などと記した。
- ・「㊦」などの略字・記号は、片仮名に直した。
- ・傍注には、句読点を付した。

〔表紙〕



〔扉〕



〔扉見返〕

三大部見述講談年号

文保 ^{二年ニテ改元}	元応 ^{二年改}	元亨 ^{三年}	正中 ^{二年}	嘉暦 ^{三年}	元徳 ^{二年}
元弘 ^{一年}	正慶 ^{二年}	建武 ^{二年}	延元 ^{二年}	暦心 ^{四年}	康永 ^{三年}
貞和 ^{五年}	観心 ^{二年}	文和 ^{四年}	延文 ^{五年}	康安 ^{二年}	貞治 ^{六年}
応安 ^{七年}	永和 ^{四年}	康暦 ^{二年}	永徳 ^{三年}	至徳 ^{三年}	嘉慶 ^{二年}
康心 ^{一年}	明德 ^{四年}	応永 ^{卅四年}			

『扉見返』

。三大部述聞卷数

。玄義述聞 八帖

自一ノ一初丁 至同卅八丁

・玄義第一聞書 觀応元年七月十六日於西尊院始之

一上

・**玄義第七** 廿三日 若約已今論本迹者〇已下

七全

自一ノ二卅九丁 至同五十八丁

△玄義第一聞書 教相下

一中

。此卷写本ハ見聞ニ入レリ。爾トモ玄一之分三冊ノ次第講談ノ日付等ノ連続ヲ以テ思フニ述聞三卷有ル内ノ中卷ト見タリ。故ニ今述聞ニ入。

觀応三年六月廿二日始行西尊院廬談ト同時講談ノ筆也。口一日分不足。前ノ第六ノ奥十紙計切レテ此卷ニ入レテ写本ニ有レ之。今此レヲ切リ分テ前ノ第六述聞ニ切入ル。又此卷ノ奥ニ施聞癡ノ三義ヲ以テト有ルヨリ十二三紙写本ハ別卷ニシテ有レ之。然トモ本体ヲ見ルニ此卷ノ奥切レテ別卷ト成リタルト見タリ。故ニ今調卷シテ一卷トス。此三大部見聞述聞ノ内如レノ此乱脱非レ一ニ見者止レ之。

『1丁ウ

自一ノ五十八丁 至一ノ二終

・玄義第一聞書 觀応元年八月六日於西尊院始之

一下

。 **玄義第七** 問要也 同玄文中引今經本迹二門〇迹耶

七

。此卷見聞ナルヘシト見タリ。爾トモ未決ノ故ニ任ニ写本ニ述聞ノ内ニ入レ之。

自一ノ一初丁同四十三丁

・玄義第二 觀応二年卯月十六日於西尊院始之

二

『2丁オ

。文句述聞 廿帖

・玄義第六聞書

是ハ吉野ノ年号也当ニ觀応三年ニ也
「正平七曆五月十日於西尊院

六全 『1丁オ

。此間ニ写本ニ重本有リ。今除レ之。

自一ノ二ノ二丁至同終

・文句第一聞書 文和三年卯月廿四日於西尊院始之

一

自六一五十六丁至六二終 私云本ノ為体奥談ト見タリ

。 **玄義第六** 問要也 私云惣修多羅非今意也

六

自一ノ二ノ二丁至一ノ二ノ九丁

・文句第二聞書 文和三年五月十五日於西尊院始之

二本

。此卷写本ハ玄一述聞ト有リ。今正シテ之第六ニ入ル。但此卷見聞ナルヘシト覺タリ。爾トモ未決ノ故ニ任ニ写本ニ述聞ノ目錄ニ載レ之。

又此卷ノ奥十紙計切レテ写本ニハ第七ノ述聞ニ入レリ。今校正シテ以此卷ノ

奥ニ切リ統テ入レ之畢。

・文句第二聞書 文和三年五月晦日於西尊院始之

二末

自三ノ一初丁至同卅七丁

・文句第三聞書 文和三年六月九日於西尊院始之

三上

此卷写本ハ見聞ニ入タリ。爾トモ第七兩冊ノ講談ノ日付ノ次第ヲ以テ見ルニ、述聞本末トスルニ宛如シ符契。故ニ今述聞ノ内ニ入レ之。

自三ノ三初丁至三三六十七丁

・文句第三聞書 文和三年六月十九日於西尊院始之

三中

・文句第八聞書 延文二年卯月十三日於西尊院始之

八一

自三ノ三初丁至同終

・**文句第三** 文和三年分西尊院

三下

・文句第八聞書 延文二年卯月廿日於西尊院始之

八二

自四一初丁至四一卅九丁

・文句第四聞書 文和四年五月廿日於西尊院始之

四上

自八二ノ十六丁 至同四十四丁

『2丁ウ

△文句第八聞書 延文二年丁酉卯月廿九日於西尊院始之

八三

自四一四十三丁 至四二四十九丁

・文句第四聞書 文和四年六月三日

四中

。此卷写本ハ見聞ノ内ニ入リ。爾トモ講談ノ日付ヲ以テ見ルニ第八述聞四冊ノ内ノ第三ト見タリ。故ニ今述聞ノ内ニ入レ之。

自四二四十九丁至四三終

・文句第四聞書 文和四年六月十九日於西尊院始之

四下

・文句第八聞書 延文二年丁酉五月七日於西尊院始之

八四

・文句第六聞書 延文元年五月廿五日於西尊院始之

六全

自九一初丁 至同卅七丁

・文句第九聞書 延文二年丁酉五月十七日於叡山東塔南谷西尊院記之

九本

自七一初丁至同六十丁

・文句第七聞書 延文元年六月廿四日

七本

私云第九ノ分三四卷有ト見タリ。爾レトモ紛失シテ此二卷ノミ存ス。中間ニ闕本アリ。

自七二六十一丁至七二終

△文句第七聞書 延文元年七月十五日於西尊院始之

七末

・文句第九聞書 延文二年六月廿三日於西尊院始之

九末

(17)

自十一初丁 至同五十六丁

・文句第十聞書 延文二年^西六月卅日始行西尊院

十本

・止觀第一聞書 延文元年九月七日於東塔東谷宝地坊始之

一四

自十二初丁 至十二十九丁

・文句第十聞書 延文二年^丁七月十七日於西尊院 廬談

十末

・止觀第一聞書 延文元年九月十七日於東塔東谷宝地坊始之

一五

『3丁ウ

『4丁ウ

『4丁オ

・止觀第二聞書 延文二年閏七月廿二日東谷談

一一

・止觀述聞 廿一帖

・止觀第二聞書 貞和三年六月五日西尊院談義

二全

自一ノ一序 至同六十六丁

・摩訶止觀第一私聞書

一

・止觀第三聞書 延文三年八月廿三日於山門東塔東谷宝地坊始

三

。此卷^ハ見聞^{ナル}ヘキ歟。止五見聞ノ内^ニ此類有^ト見^{タリ}。爾^{トモ}未決ノ故^ニ述聞^ニ入^レ之。

自三ノ初丁 至三三四十二丁

・止觀第三聞書 貞和四年四月十六日於西尊院被始行之

三上

自一ノ一始 至同十一丁

・止觀第一聞書 延文元年^丙八月十二日於東塔東谷宝地坊始之

一一

自三ノ二四十四丁 至三ノ三卅三丁

・止觀第三聞書 貞和四年五月十日西尊院

三中

自一ノ一ノ十二丁 至同卅七丁

・止觀第一聞書 延文元年八月十八日於宝地坊始之

一二

自三ノ三卅四丁 至同終

・止觀第三聞書 偏四以下

三下

自一ノ一卅七丁 至六十四丁

・止觀第一聞書 延文元年八月廿七日於宝地坊始之

一三

自四ノ一初丁 至四ノ一四丁

・止觀第四聞書 貞和四年六月三日於西尊院被始行之

四本

自四二ノ五丁 至四二ノ七十五丁

止観第四

六月十七日 息諸縁務下

四末

。三大部見聞卷数

『5丁オ

。玄義見聞 廿四帖

自六一六十二丁 至六一六ノ五丁

・止観第六聞書 貞和五年六月廿四日

六本

・玄義第一本書聞書 観応元年七月十六日於西尊院始之 廬山寺御談 一全

自六三ノ五丁 至六三ノ六十二丁

・止観第六聞書 貞和五年閏六月六日

六末

私云此玄二分両卷有リテ上卷紛失^{スト}見^{タリ}。七月十六日^{ヨリ}廿二日

。止六ノ分述聞上中下三册有^ト見^{タリ}。爾^{トモ}上卷紛失^ス。故^ニ此二册^ノ存^{セリ}。

マテノ分不足。

・止観第八私聞書 観応元年五月十六日西尊院

八

・玄義第一聞書 観応元庚寅七月廿三日
私云澄全ノ筆記也^ト見^{タリ}。

一

自九一初丁 至同六十八丁

・止観第九聞書 観応元年六月八日於西尊院始之

九本

△玄義第二 述門十妙 門ノ外題ニ玄義第二本書聞書 観応二年辛卯四月十六日廬師御談於西尊院 二全

自九一六十九丁 至九二六十五丁

・止観第九聞書 観応元年六月廿日於西尊院被談之

九末

・玄義第二本書聞書 観応二年四月十六日於西尊院始之廬山寺御談 二全

・止観第十聞書 観応元年七月三日於西尊院始之

十全

△玄義第二聞書 観応二四十六於西尊院明道^{トモ}上人談横川澄全記之 二全
。此卷写本ハ述聞^ニ入^レ之。爾^{トモ}横川澄全ノ筆記見聞ノ内ニ多有^レ之。此

・摩訶止観第十問要

十

一卷ノミ述聞^ニ可^レ入^キ入道理ナシ。故^ニ今^ノ入^レ見聞^ニ。

此卷見聞^ニ可^レ入^キ入歟。如^レ此類見聞ノ内ニ多有^レ之。爾^{トモ}未決ノ故^ニ任^ニ写

・玄義第二聞書 貞和二四廿九日於西塔南尾賢聖坊廬山寺明道^{トモ}上人御談 二

本^ニ入^レ述聞^ニ。

私云澄全筆記歟。

自二ノ一初丁 至同四十七丁

『6丁ウ

△玄義第二聞書 問要也 元德二年十一月廿五日於上北小路猪熊奥坊始之 二

奥師示

。此卷写本ハ述聞ニ入^{タリ}。爾^{トモ}此ノ卷ノ類奥師ノ談皆見聞ニ入^レ之。故^ニ此
一卷述聞ニ可^レ入^ル道理ナシ。故^ニ今見聞^{トス}。

・玄義第三本書聞書 觀応二年五月十一日於西尊院 盧談 三全

嘉曆二年七月一日於上北小路猪熊奥坊始之

△玄義第三本書聞書 嘉曆二年二月廿八日於実藏坊始之 実師示 三全

。此卷写本ハ述聞ニ入^{タリ}。爾^{トモ}此ノ本ノ如^{キハ}余皆見聞ニ入^レ。故^ニ今見聞^{トス}。

自三ノ一初丁 至同六十一丁

・玄義第三聞書 盧談 二帖内上 二本

自三ノ二六十二丁 至三ノ二六十七丁

・玄義第三聞書 盧談 二帖内下 三末

・玄義第四本書聞書 觀応二年六月十四日於西尊院始之 廬山寺御談

四全

『7丁オ

自五ノ一初丁 至同廿一丁

・玄義第五聞書 盧談 首尾一帖 五

自五ノ一卅四丁 至五ノ二五十五丁

△玄義第五 難云已断ヲ云也

五

。此卷写本ハ述聞ニ入^レリ。爾^{トモ}本ノ為体ヲ見聞ト見^{タリ}。故^ニ入^レ見聞ニ実
談ト見^ヘタリ。

自六ノ一初丁 至同七十八丁 吉野ノ正平七年ニ当^ル也

・玄義第六本書聞書 觀応三年五月十日始之 廬山寺御談 六

・十不二門本書聞書 觀応三年六月十二日於西尊院始行之 廬山寺御談 六

自七ノ一初丁 至廿五丁

・玄義第七本書聞書 觀応三年六月廿二日於西尊院始之 廬山寺御談 七

・玄義第八本書聞書 文和二年四月十六日於西尊院始之 廬山寺御談 八全

・玄義第八聞書 文和二年四月十六日於西尊院 八全

私云横川直海ノ筆記

『7丁ウ

・玄義第九本書聞書 文和二年五月八日於西尊院始之 廬山寺御談 九全

・玄義第九聞書 文和二年五月八日於西尊院 九全

私云直海ノ筆記

・玄義第十本書聞書 文和二年五月廿九日於西尊院始之 廬山寺御談 十全

・玄義第十私聞書 文和二廿九日於西尊院始之 十全

当座馳筆 私云証全ノ筆記歟

自二ノ一初丁 至同五十四丁

『8丁ウ

△玄義第十聞書 私云文二年五月廿九日於西尊院廬談也 十全

私云直海ノ筆記

。此卷写本ハ述聞ニ入レリ。爾レトモ此ノ直海ノ筆記見聞ノ内ニ玄ノ八九直海筆記アリ。故ニ此玄十又見聞ニ入レ之。述聞ニ入ルヘキ無ニ道理一。『8丁オ

。文句見聞 十九帖

・文句第二聞書 二帖之内下 尊契御談 日諦之記 二末

・文句第一本書聞書 文和二二年六月廿八日於西尊院始之 廬談 一全

・文句第三本書聞書 文和三年六月九日於西尊院始之 廬山寺御談 三

自一ノ一序 至同廿丁

・文句第一聞書 享祿四年二月廿四日始之北林房尊契御談 一上

・文句第三本書聞書 延文五年庚子六月十三日於西尊院始之 廬談 三全

自一ノ一廿二丁 至同五十九丁

〔文句第一〕 尊契談 日諦記 一中

・文句第三聞書 上卷別序下 私云尊契談 三

自一ノ一廿六丁 至一ノ一終

・文句第一聞書 四帖之内第四 私云尊契談 一下

・文句第四本書聞書 康安元年五月廿日於西尊院始之 廬談 四

。私云文句一尊契談四帖有リト見タリ。第三帖目一冊紛失セリ。

『9丁オ

・文句第二聞書 文和三年五月十五日於西尊院始之 廬山寺御談 二全

・文句第七本書聞書 延文元年六月廿四日於西尊院始之 廬談 七全

・文句第二聞書 延文四年己亥八月九日於西尊院始之 廬談 二全

・文句第七本書聞書 貞治三年六月六日於西尊院始之 廬談 七全

・文句第八本書聞書 延文二年^{丁酉}四月十三日於西尊院始之 廬談 八全

・文句第八本書聞書 貞治四年七月四日於西尊院始之 廬談 八全

・文句第九本書聞書 延文二年^{丁酉}五月十七日於西尊院始之 廬談 九全

・文句第九本書聞書 貞治五年^{丙午}七月一日於西尊院始之 廬談 九全

。此卷ノ奥ニ文句第十ノ見聞合^{シテ}一冊トス。写本別卷^{トスト}云^{ヘトモ}纔^ニ兩三紙有^レ之。故^ニ今文句第九^ニ合^{シテ}一冊トナス。

・文句第十本書聞書 延文二年^{丁酉}六月卅日於西尊院始之 廬談 十全

。止觀見聞 卅九帖

自一ノ一始 至同四十九丁

・止觀第一本書聞書 延文元年八月十二日於東塔東谷宝地坊始之廬談 一本

自一ノ一四十九丁 至一ノ三終

・止觀第一本書聞書 延文元年於宝地坊 廬談 一末

・止觀第一 廬談 一全

私云貞和三年六月四日講談畢廬談也。

自一ノ一始 至一ノ一ノ十八丁

・止觀第一 慶安元年西尊院談義 廬談歎実談歎。

自一三ノ二丁 至五十二丁

・止觀第一聞書 問要也 奥談 問四諸列次第從^レ何義^ニ耶 一

・止觀第一聞書 問要也 奥談 山王講頭指事六ヶ條文保三年正月分 一

・止觀第一 問要也 嵯峨殿御談義 一

經法印云^{トアルハ} 信印云^{トアルハ} 信永法印也。
私云此卷ノ内ニ明印云^{トアルハ} 靜明法印也卷ノ内ニ爾見^{タリ}。

自一ノ一始 至一ノ二卅五丁

・止觀第一 自受用土事 一

・止觀第一 問要也 十義事 一

私云嵯峨殿御談義^{トアル}卷^ト同談歎。廬談^{ニハ}非^ル乎。

自一ノ一四丁 至一ノ二四十九丁

・止觀第二本書聞書 延文二年^{丁酉}閏七月廿二日於東塔東谷宝地坊 廬談 一一

・止観第二本書聞書 貞和三年六月五日於西尊院始之 廬山寺談 二全

自二ノ初丁 至同八丁

・止観第二本書聞書 応安三年四月十六日於西尊院始之 二一

・止観第三本書聞書 貞和四年四月十六日於東塔南谷西尊院始之 三全

廬山寺明道上人御談

・止観第三本書聞書 曆応三年四月十六日於西尊院始之 実談 三四

。此卷ノ奥ニ止第四ノ見聞六七紙合シテ一冊トセリ。写本ヨリ如此。『11丁オ

・止観第四本書聞書 貞和四年六月三日於西尊院始之 廬山寺御談 四全

・止観第五本書聞書 曆応四年五月一日於東塔 五全

南谷西尊院始行之 実談

自五一初丁 至五二ノ五丁

・止観第五本書聞書 貞和二年六月晦日於西尊院始之 廬山寺御談 五天

。此卷ノ奥ニ六日止云三障四魔者○トアルヨリ 已下廿七八紙ハ別卷ニシテ述聞ノ

内ニ古本ハ有レ之。今正レスニ之往古ノ本紛乱シテ別卷トナレリ。講談日付ノ

為体ヲ以テ思フニ一卷トスルニ便リアリ。

自五二冊七丁 至五四六十六丁

・止観第五本書聞書 貞和五年五月十六日於西尊院始之 廬山寺御談 五地

自五一初丁 至五二ノ十五丁

・止観第五 決云若後有人依前五略 五

自五一廿五丁 至同六十七丁

・摩訶止観第五本書聞書 廬談 五一

『11丁ウ

自五一六十八丁 至五二ノ十五丁

・止観第五 七月四日 観応具十法門者。 五一

自五二ノ十五丁 至同終

・止観第五 七月十五日 当知第一義中。 五三

自五三初丁 至同四十五丁

・摩訶止観第五聞書 貞和五年五月吉日 五四

自五一初丁 至五三ノ四十二丁

・止観第五 問要也 中修多羅藏也。私云奥談也。 五本

自五三冊一丁 至五四六十一丁

・止観第五聞書 問要也 奥談 五末

・止観第六本書聞書 延文四年^巳六月廿四日於西尊院始之 廬談 六全

・止観第六本書聞書 貞和五年六月十三日於西尊院始之 廬山寺御談 六全

自六一初丁至同卅一丁

・止観第六私抄 元応二年十月廿二日始之

問要也 同十一月廿三日終功畢 奥師示

『12丁オ

六

・止観第九本書聞書

康安元年^{辛巳}七月十六日

西尊院談義始之 廬山寺御談

九全

自六一ノ二丁 至六ノ三ノ四十丁

・止観第六本書聞書 曆応五年四月十六日於東塔南谷西尊院始之 実談 六

自七一初丁 至七二卅九丁

・止観第七聞書 貞和五年閏六月十六日於西尊院始之 廬談 七一

自七二卅七丁 至七三廿二丁

・止観第七聞書 上之下 貞和五年 廬師談 於西尊院 七二

自七三廿二丁 至同四十八丁

・止観第七聞書 貞和五年七月十日於西尊院 廬談 七三

自七三四十八丁 至同六十七丁

・止観第七聞書 下之下 貞和五年 廬師談 於西尊院 七四

・止観第七本書聞書 康永元年六月十一日於東塔南谷西尊院始之 実談

。此卷ノ奥ニ止八見聞合シテ七八ヲ一冊トス。写本ヨリ如此。 七八全

・止観第八本書聞書 観応元年五月十六日於西尊院始之 廬山寺御談 八全

・止観第九本書聞書 観応元年六月八日於西尊院始之 廬山寺御談 九全

『12丁ウ

・止観第九本書聞書 康永二年六月三日於西尊院始之 実談 九十

。此卷ノ奥ニ止第十見聞一紙合シテ有レ之。写本ヨリ如此。

・止観第十本書聞書 観応元年七月三日於西尊院始之 廬山寺御談 十全

『13丁オ

。三大部述聞 四十九帖 。三大部見聞 八十二帖

・玄義述聞 八帖 ・玄義見聞 廿四帖

・文句述聞 廿帖 ・文句見聞 十九帖

・止観述聞 廿一帖 ・止観見聞 卅九帖

・三大部見聞述聞都合百卅一卷

但往古ノ写本百卅五卷也。爾トモ

。玄七述聞切^レ別卷^ト成^リタルヲ今ハ合^シテ為^ス一冊ト。

。玄六述聞^ニ往古ノ本重本有^レ之。今除^レ之。

。文十見聞^ニ纔^ニ三紙有^ル第九^ニ合^シテ為^ス一冊ト。

。止五見聞切レテ半分止ノ述聞ニ入ルヲ今合シテ為見聞一冊ト。『13丁ウ古ノ分四冊往古ノ写本ヨリ減スル之者也。故ニ今般調卷ノ時減二四冊一為二而卅一冊ト。

又山門東西両塔ノ本調卷不レ齊カラ増減有之。故ニ今般所持ノ本京都往古ノ本如調卷シテ而減二四冊一者也。四冊ハ古ニ一々挙げ之示ス。

又山門三塔ノ新本或ハ以ニ述聞ヲ入レ見聞ノ内ニ以ニ見聞ヲ入レ述聞ノ内ニ。或ハ古来一冊ノ本紛乱シテ成リ二冊ト第六ヲ為第七ト等ノ類甚不レ少。今般調卷ノ時講談ノ年号日付或ハ本ノ為体ヲ以テ互ニ交雜シテ正レ之。此目錄ノ内ニ当ニ其ノ卷ニ指南有レ之。猶見述之内未決ノ本ヲ任ニ写本ニ入レ置ク者也。京都往古ノ写本於ニ蔵庫ノ

内ニ久歴ニ星霜ニ表紙等紛乱シテ見(ニ14丁オ)聞述聞ノ異難レ弁。或ハ乱脱シテ一卷ノ本成ニ兩冊ト等ノ謬リ校正之者無レ之故ニ如此歟。見者察レ之。

又見聞ノ内題ノ処ニ本書聞書ト有ルハ是顯幸ノ筆記ト見タリ。三大部俱ニ爾リ。玄見ノ内ニ横川澄全ノ筆記同直海ノ筆記有レ之。供ニ盧山寺明道上人談レ之。

文句見聞自ニ第一ニ至ニ第三ニ三井寺勸学院ノ一代尊契講談都合六冊有レ之。日諦ノ筆記也。

又止觀第五見聞ニ顯幸ノ筆記ニ非ル本雜シテ有レ之。『14丁ウ

又通シテ三大部ニ奥談ト云本多交雜シテ有レ之。京都猪熊奥之坊歟ト見タリ。実談ハ実藏坊歟。

又見聞ノ内顯幸ノ筆記ト述聞ハ多分同聽異述ノ筆記也。講談ノ年号日付ヲ以テ思ニ爾見。故ニ述聞ハ顯幸ノ筆記ニ非スト見タリ。止

十述聞ノ終リノ奥書ヲ見レ止觀一部ノ述聞ハ澄空ノ筆記歟。

又此目錄ニ頭ニ△如レ此有ルハ古本見聞述聞入レ替リタル本ニ如レ此ノ印シラナス。□如レ此有ルハ本ノ口ニ卷付無キ本ヲ今目錄ニ載ル時私ニ部ノ名卷ノ名書付ルヲ如レ此印シラナス。○頭ニ如レ此アルハ見聞述聞ノ間未決ニシテ任ニ写本ニ入レ置ク之ヲニ如レ此印シラナス。廬山寺ヲハ号ニ淨聖院明道上人ト。見聞(ニ15丁オ)筆者顯幸ヲハ号ニ実藏坊ト。義例猪熊抄奥ニ爾見タリ。

又問要作レ之卷都而十一卷有レ之。一々之卷ノ下ニ問要也ト以レ朱書レ之。所謂
・ 止一見談・ 止五見本・ 止五見末末・ 止六見末
・ 止一見談・ 止一見十・ 止十述

慶安中於山門西塔院三大部見聞述聞全部捐淨貲令人傭書交講肆之暇手自書之古本紛失猶有闕本脱落晚還郷里見述之間混乱正之重本除之。調卷為一百三十一卷出目錄一貼留贈後学也。

寛文元年九月日 播陽斑鳩寺仏餉院寂阿
〔播州斑鳩仏餉院(朱印)〕

『15丁ウ